

第2回 Harmonizing基礎②

Dominant Approach Group

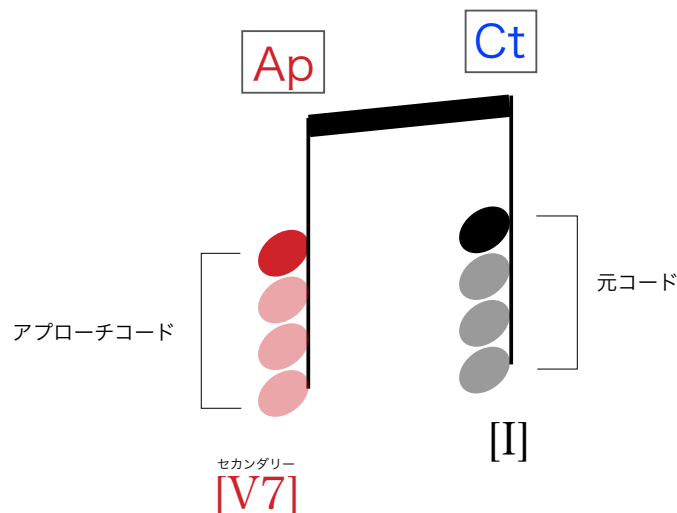
Dominant Approach Groupは元コードのセカンダリードミナントコードをアプローチコードに用い、そのセカンダリードミナントコードの種別で次の3種類に分かれます。

Altered Dominant Approach

Diminished Approach

Dominant Approach

Dominant Approach Groupを用いたHarmonizingのイメージ



アプローチトーンに用いられるアプローチコードが元コードにDominant motionをするというのが理論の根底にあります。この時言うまでもなくバックサウンドでは元コードが流れ続けています。アプローチコードが鳴らされる瞬間は「アプローチコード + バックで流れ続けている元コード」が同時になります。当然その瞬間はものすごいDissonance(不協和音)な状態となるわけですが、瞬時の解決によりさらに豊かな魅力あるサウンドと昇華します。ちなみに、この「瞬間的なDissonance状態」の耐えうる時間は約1秒とされています。

Dominant Approach Groupの説明には【条件】の前にまず【作り方】の成り立ちから説明します。なお、【条件】は「アプローチトーンのエコードルートから見たインターバル」が共通になります。

Altered Dominant Approach (ADA)

Altered scaleから作られる次の2種をアプローチコードに用います。セカンダリードミナントコードとして作るので元コードのルートを(I)としてV7で表します。

【作り方】

$$V_7 \begin{pmatrix} \#9 \\ \flat 13 \end{pmatrix} \quad V_7 \begin{pmatrix} \flat 9 \\ \flat 13 \end{pmatrix}$$

アプローチトーン(Ap)が、このテンション部分「 $\flat 9$ 」「 $\#9$ 」「 $\flat 13$ 」に当たった時に用います。

これらの音は元コードのルートから見直した時に

アプローチコード テンション		元コードから見た インターバル
$\flat 9$	→	$\flat 13$
$\#9$	→	m7
$\flat 13$	→	m3

となります。

【Ex】元コード「C」の場合、アプローチコードは $G7(\#9 \flat 13)$ $G7(\flat 9 \flat 13)$ となる

Diagram illustrating the relationship between the original chord (C) and the approach chords. The original chord (C) is shown with its notes (C, E, G, B). The approach chords are $G7(\#9 \flat 13)$ and $G7(\flat 9 \flat 13)$. The diagram shows the intervals between the original chord notes and the approach chord notes, highlighting the tensions $\#9$, $\flat 13$, $\flat 9$, and $\flat 13$.

【条件】

元コードのルートから見てアプローチトーンのインターバルが

「m3」「 $\flat 13$ 」「m7」

に当たる時。

【Tips】

Ap=m3のときは

元コードがメジャー系の時・・・ $V7(\#9 \flat 13)$

元コードがマイナー系の時・・・ $V7(\flat 9 \flat 13)$

と使い分けます。

Diminished Approach (Dim.A)

セカンダリドミナントコードにV7(♭9)を考えます。このV7(♭9)のルートを除いた上部4和音構造はDiminished chordとなり、それらのインターバルは元コードのルートから見て「9」「11」「♭13」「M7」となります。これらを再合成した4和音は元コードルート(I)から見るとIlo7です。

【Ex】元コード「C」の場合、アプローチコードはG7(♭9)となる

元コード「C」の場合、アプローチコードはG7(♭9)となる

元コードルートに近い音から並び直して

ディミニッシュコード

Apコード G7(♭9) → Apコード Do7

【作り方】

Ilo7

元コードルートの全音上から始まるDiminished chord

【条件】

Diminished chordは構成音がm3の等間隔で並ぶので、全転回形を用いることが可能になります。すなわち、元コードルートから見たアプローチトーンのインターバルが

「9」「11」「♭13」「M7」

に当たる時となります。

Dominant Approach (Do.A)

Dominant Approach は1箇所のみ用いられます。

【条件】

元コードルートから見たアプローチトーンのインターバルが

「13」に当たる時。

【作り方】

$V_7 \begin{pmatrix} 9 \\ \flat 13 \end{pmatrix}$

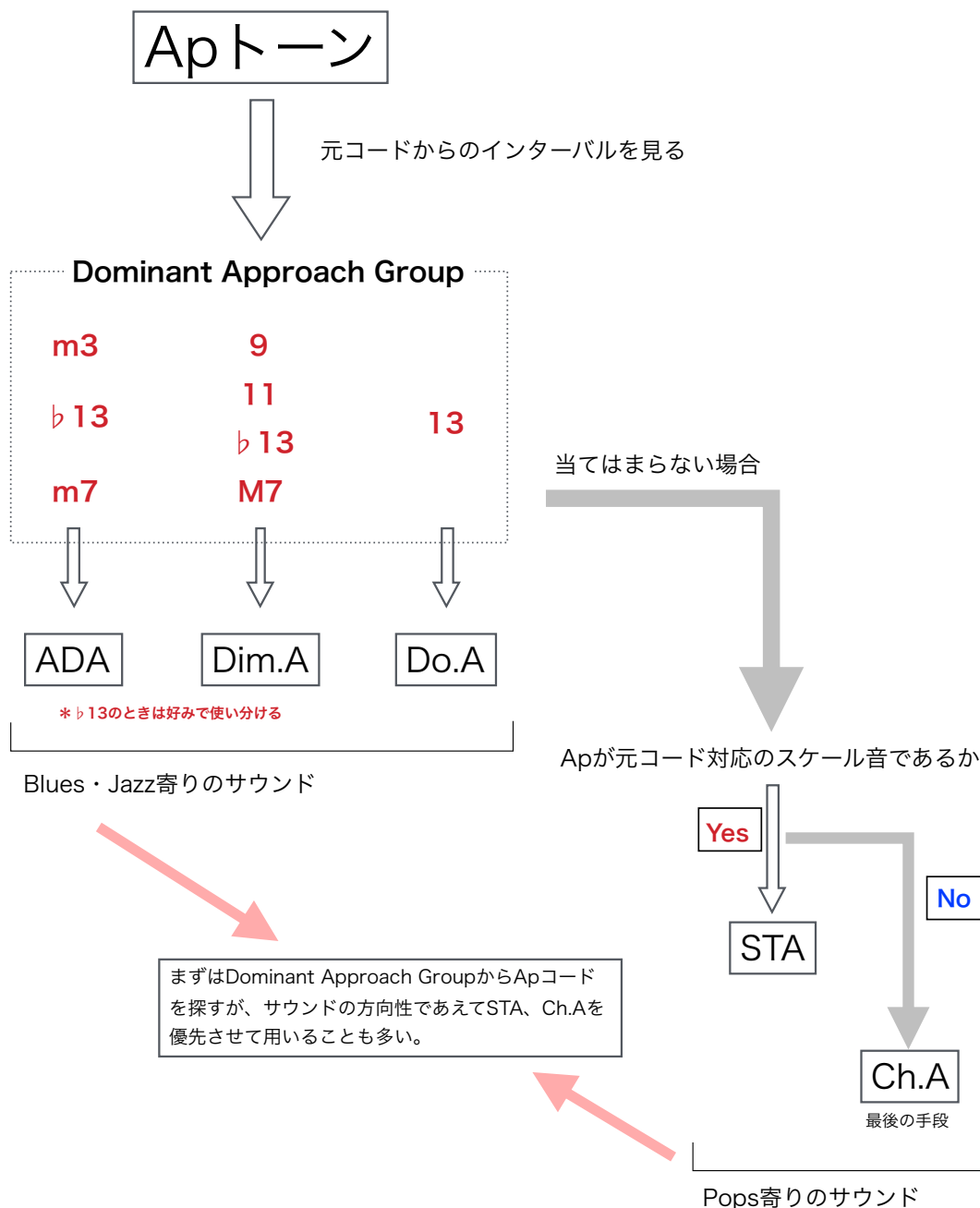
注)このコードはアプローチコードのみに用いられるコード形です。通常メロディを支えるコードとしては使いません。

Dominant Approach Groupの特徴

アプローチコードにドミナントコードを用いることによりブルース、ジャズ寄りのサウンドになります。スケールトーンアプローチ、クロマチックアプローチがポップス寄りのサウンドになるので、求めるサウンドの方向性によって使い分けていきます。

アプローチコードの探し方チャート

Apトーンは通常数種類のApコードが使えます。Apコードにどのアプローチが使えるかをチャートにまとめてみます。



【3-1 Etude1】からのHarmonizing②

Ap部分を変更したバージョンも含めて次のメロディにHarmonizingします。

用いるアプローチの種別でサウンドが変化します。求めるサウンドに応じて適切にアプローチを選択できるようにしておくことが重要です。また、状況によってはApproach harmonizingよりもブロックコードを用いたほうが結果が良くなる場合もあります。柔軟な対応が必要です。

そして重要なことは、これらのHarmonizing技法を用いた時にメロディがおかしく聞こえてしまうときはメロディそのものが破綻していないかを疑うことです。特にApトーンが適切にCtへ解決していない場合が多いです。何よりもメロディ構築が重要だということを心得てください。

実践 Harmonizing 練習曲

【3-2 Etude1】

以下の練習曲で実践的にHarmonizingしてみましょう。まずはメロディをApとCtに仕分けます。そのために最初にするのはメロディに元コードルートからのインターバルを付けることです。繰り返すフレーズを除いた3小節目からラストまで、ちょうど音符が50個あります。100秒で全部のインターバルを付けられることが実践では必要になります。

Harmonizing Etude

E7^{sus4} E7^{alt} FΔ7

Dm7/G E7^{alt} E7^{alt}/G# Am7

Dm7 Dm7/G G7^{b9}

CΔ7 BØ7 E7^{alt}